

高水協議会論点

今までの手法への問題提起(9河川の流出解析の共通した問題点)	新たな(今後の)手法等の提案
<p>流出解析(中小河川における)</p> <p>計画規模 100~30年でよいか C,D,E級への適用が適正か 洪水防御計画規模の決定の判断は正しいか 治水安全度の用語の定義</p> <p>洪水確率 100年確率雨量によって引き起こされる基本高水を越える洪水は100年確率か 100年に一度の基本高水を越える洪水が問題なのか 基本高水流量は統計確率的選択の問題(ピーク流量の最大から平均値間) 年超過確率の用語の定義</p> <p>モデルの選定 雨量から流量への変換に問題 洪水モデルの選定が問題(選定の理由・流域の特性を反映しているか) 実績洪水値と計画洪水値の違い 水害発生実績洪水での流出解析必要 実測データとの整合必要 蓄積されたデータによる再検証 計画降雨量の決定(流域平均雨量・年最大流域平均雨量・実績降雨との適合性) 実績降雨、計画降雨の棄却条件(引き伸ばし適用の問題) 流域の流出特性にあった手法か カバー率100%は適正か 合理式での検証がない・集水面積の観点から合理式法の採用をしていない 流量確率からの検証をしていない 流出率の用語の定義</p> <p>定数設定 一次流出率と飽和雨量の設定値に問題 貯留関数の定数決定根拠 流出係数値の決定根拠 その他K,Pなど 洪水再現計算による検証がされていない</p>	<p>高水協議会の存在意義</p> <p>流出解析手法(貯留関数法以外) 新しい観点での基本高水の算出方法 新たなモデル(流域状況総合把握)・タンクモデル等 統計的手法(ピーク流量のみ着目なら十分・実洪水分布・実降雨量分布) 河川砂防技術基準から離れて議論 貯留関数法以外の手法を採用</p> <p>モデルの選定 実績洪水値が重要(流量計故障等測定不能時に痕跡法等を必ず実施) 既往最大洪水の重要視 既往最大洪水を基準に基本高水を算出 降雨波形の平均化による流量算出</p> <p>考慮すべき特性 森林状況考慮、森林効果(保水力・土砂流出抑制) 地質構造 伏流水 土石流考慮 水害特性の把握 下水浄化施設排水流入 河川環境条件 諏訪湖の貯水排水能力の検討 それぞれの河川ごとの水害特性の把握、内水等 飽和雨量(森林の保水力の観点から) 余裕度の取り方(誤差に対するもの・森林効果・土地開発)</p>
<p>観測(中小河川における)</p> <p>場所 流量観測場所の問題(下流に必要) 水位観測所の位置不適 治水基準点の位置不適 計画範囲(基準点)不明確 雨量観測場所が流域を代表する位置に無く正確性に疑問 雨量観測場所の問題</p> <p>精度・方法 水位データ疑問 流速観測方法が不適切 水位から流量への変換に問題・流量計算方法とその検証 雨量・流量・水位観測点不足、不適 記録管理体制の整備 水位・流量・流速・堆砂断面の記録が皆無 雨量観測の精度 水位計測機器の問題・圧力式の問題 水位計測機器の問題・監視カメラ導入</p> <p>流下能力の検証 流下能力の把握 粗度係数 河床勾配 地形</p> <p>データ不足 雨量データ貧弱 流量データ皆無 長期的データ収集必要・蓄積されたデータ必要</p>	<p>観測データ収集 最近の観測資料と比較評価が必要</p>
<p>基本高水流量の再検証 適時見直し必要 何十年も変更しない 支川合流地点は変更するが、基準点では変えない 変えない理由は(ダムのため?) ダムカット流量と治水基準点流量の関係 ダム計画の履歴と基本高水 9河川の基本高水は、河川法改正以前、ダム計画を目的に算定された 見直しの法的手続き、薄川はどうなっているか 比流量、流量確率などによる検証は意味があるか 設定された基本高水の比流量チェックがない 総合的な土砂管理 総合判断</p>	<p>現行基本高水流量の検証・訂正 法・規制等の改正に伴う見直し 総合治水(水防)の観点からの見直し 学者・行政の減災への不適用 地域全体の基本高水算出 既存ダムの洪水比流量チェック</p>
<p>河川砂防技術基準の問題点・技術基準の内容と解釈、運用 解釈自由な表現 一方的安全サイドの算出 アンバランスな治水安全性 未熟な基準(案) 旧基準のままの観測体制不備</p>	
<p>基本方針と整備計画 広域の河川整備計画の策定・推進が先</p>	